

## 日本と独の原発政策はなぜこれほど違うのか（下）

プロテスタンティズムの倫理が生まれた歴史

高部英明 ドイツ・ヘルムホルツ研究機構上席研究員、大阪大学名誉教授

メルケル首相の倫理委員会設置と倫理に基づいた政治的判断を<sup>2015年12月12日</sup>もたらしたプロテスタント的倫理観は、欧州でどのように形成されて今に至るのか。これを理解しないと、日本人は欧州との人間的な信頼関係を築けないとドイツに住んでみて感じている。まずは歴史を理解したい。

### ドレスデンの近くで生まれたルターの宗教改革

マルティン・ルター（1483-1546）はドレスデン近くの村で生まれた。神童として名を馳せ、18才で大学に進学し哲学を学ぶ。エリートコースを両親は期待したが、修道院で聖書を深く読み「神の義」を学ぶ道を選んだ。

当時、教会は「罪深い人間は贖宥状（しよくゆうじょう：免罪符）を買うことで、天国に行ける」と説き、金権宗教になり果てていた。教皇がバチカンに聖ピエトロを称える寺院を建設しようと資金集めをしていたからだ。聖ピエトロはキリストの教えを広めるためにローマ帝国の首都に赴こうとして、兵に捕らえられ、今日のバチカンの地で処刑された人である。

本来の新約聖書によるキリストの伝承は、「隣人を愛せよ（隣人愛）」。罪深き者も現世で善行を重ねることにより、あの世での審判で、天国で永遠の第2の人生が待っている、であった。己の利益より家族隣人への愛を優先せよともとれる。

ところが当時のキリスト教は腐敗していた。さらに権威主義で聖書もギリシャ語の原書のままとし、教育を受けていない一般市民には聖書が何を言っているのかわかりかねた。そこに、聖職者が己の解釈で神の言葉の仲介者となり、教皇が意のままに信者を操った。これは今日で言えば情報の独り占めである。どんな組織でも独裁者は情報を独り占めにし、組織を操りたがる。



ドレスデン旧市街地、聖母教会の広場に立つマルティン・ルターの像

ルターは意を決し、聖書をドイツ語に翻訳することに決めた。新約聖書の言わんとすることが市井の人たちにわかれば、当時の教会の権威の化けの皮ははがれる。聖書の中にこそキリスト教の真の教えがあることを彼は広めようとした。

幸い、ザクセン侯が治めていた地（都がドレスデン）での庇護も得て、その教えは燎原（りょうげん）の火のごとく広まった。ドレスデンの聖母教会の広場には彼の立像が写真のように神を見つめている。ルターが始め、カルバンが引き継いだ新教は今日「プロテスタント」と呼ばれ、バチカンを総本山とする「カトリック」と別の道を歩んでいる。

### 資本主義とプロテスタント的隣人愛・次世代への愛

西欧では、産業革命を経て資本主義が発展してきた。ドイツの社会学者のマックス・ウェバー(1864-1920)は「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という論文(1905年)で、宗教改革によるプロテスタントの教義と資本主義の「精神」には因果関係が存在することを指摘した。ここでいう資本主義の「精

神」とは理想的精神であり、単なる利益の追求や、そうさせる拝金主義を示すのではない。つまり、現世での死（第一の死）の後に控えた最後の審判に備え、禁欲的で勤勉な行いを伴うことを重んじる資本家、労働者としての活動である。

聖書の教えに従い禁欲的であることで、勤勉に仕事に励み、結果として利潤を得るのであれば、その利潤は労働による生産物が人類の生活向上に貢献したことの証である。キリストの教えである「隣人愛」の実践に他ならない。つまり、労働は神の御心にかなっていると理解できる。

ウェバーの説は21世紀のグローバル化した資本主義の世界にも適用できるだろうか。資本主義の総本山・米国は清教徒によるプロテスタント国家から始まった。しかし、今やその経済システムは「リーマン・ショック」に顕著に表れたようにいびつに膨らみ、プロテスタンティズムを単に拝金主義の金儲けの正当性の解釈に使っているだけのように思える。



マックス・ウェバー。彼は産業革命以降の西洋の資本主義による豊かさは、禁欲的なプロテスタントの教えが背景にあると結論した。

では、ルターを生んだドイツ・欧州はどうだろうか。EUはたびたびの財政危機（ほとんどがカトリックや東方正教の国々）に見舞われながらも、経済的な統合から政治的な統合の歴史的实验を、時間を掛けて進行させている。科学・技術も常に5カ国以上の研究者が連携してプロジェクトを推進し、国境を越えた協力の重要性を実証しようとしている。

彼らの信頼関係の中にあるのは、ドイツの場合はキリスト教的民主主義である。ドイツなど富める国がEU予算に貢献し、旧共産圏の加盟国（東方正教が多い）のインフラの整備や科学・技術支援をしている。損得だけで計れない大欧州建設という「次世代への愛」による広域経済圏・政治連携に努めているのである。その壮大な試みには隣人愛を貫くキリスト教精神の支えを見る思いがする。

ひるがえって日本の状況を見れば、「上」で述べたように日本人は無宗教で、帰依する宗教に基づいた規律を持っていない。例えは悪いが、イスラム国に見られるように宗教は人間に行動原理を与え、同時に精神的に支える。そうした精神的支えが日本にないから、メルケル首相のように、事故を契機に政策見直しにまでつなげる未来志向の決断ができなかったのではないか。

原発の善し悪しの判断は科学・技術の議論に終始し、次世代まで考慮した倫理観の議論などは沸騰するには至らなかった。結局、半世紀前と同じ既得権者である産業界と天下り先を維持したい官僚の画策で原発再稼働となった。論

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.